

平成 30 年 5 月 21 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03331

研究課題名(和文) 利己心の系譜学

研究課題名(英文) a genealogy of self-interest

研究代表者

太子堂 正称 (TAISHIDO, Masanori)

東洋大学・経済学部・准教授

研究者番号：40511332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代の経済理論が前提としている人間像について、その思想的系譜を解明することを目指して行われた。スコットランド啓蒙における「経済学の成立」から現代の行動経済学・神経経済学へと至るまでの野党な経済学者、理論の分析を通じて、効用や利潤の最大化を図る利己的人間観が登場してきた過程だけではなく、それぞれの経済思想家の主張の背後には、利他性や社会性を含む多様な人間像が含まれていたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research project has been performed to clarify a genealogy of economic agents on which economics traditionally has been based, from “the birth of economics” in Scottish enlightenment to current behavioral economics or neuroeconomics. In this analysis, it has become clear that not only the historical context of the advent of “homo economicus” or the idea of “self-interest” is very important, but also that it has involved various and diversified images of human including altruism and sociability.

研究分野：経済思想

キーワード：経済思想者間交流 利己心 利他心 行動経済学 神経経済学 経済学方法論 研究業績の国際発信 国際研究

1. 研究開始当初の背景

これまでの経済理論の主流的立場は、人間の経済行動の合理性と、その前提としての利己的人間像に依拠してきた。一方で、情報の非対称性など、市場における経済行動の合理性は限定的であることも指摘されてきたし、近年の行動経済学や神経経済学の発展は、利他心を含む合理性以外の本能や様々な感情といった動機をも明らかにしつつある。

こうした研究成果が個別の経済行動について様々な知見をもたらしたことは確かだが、今なお統一的な人間像、あるいは利己心像といったものは確立されているとは言えず、経済理論の根本の組み替え・変更を行うまでには至っていない。

利己心概念は、論者や時代によって大きく異なっており、きわめて多様であるが、それらを様々なテキストから析出することによって明らかにするとともに、経済理論の発展へとフィードバックを行うことが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、スコットランド啓蒙から現代の行動経済学・神経経済学に至る様々な経済学者たちが、どのような利己心像あるいは人間像を前提としており、それらの観点をそれぞれの経済理論と堂接合したかについて、通史的かつ根本的な解明を行うことを目的として行われた。

具体的には、(1)これまで蓄積されてきた利己心研究の体系化、(2)各経済学者たちが想定してきた人間行動原理と経済理論の明示的・暗黙的關係の解明、(3)単なる利己性に還元されない様々な人間行動の諸要因の解明、を目指した。

考察の対象は、アダム・スミスやアダム・ファークソンなど 18 世紀の古典派経済学から、ベンサム、ミルら 19 世紀の経済学、ケインズ、ミーゼス、ハイエクら 20 世紀の経済学、そして行動経済学・神経経済学などの最新の理論にまで至った。特に、その際、ポランニーやノイラートなど、主流派経済学とは立場を異にする経済学者や利己的人間観に批判的な経済学者の検討も行うことで、これまで捨象されてきた利己心の多様性を明らかにされる。

その上で、個々に蓄積されてきた利己心論研究をまとめ上げ、新たな知見を加えて海外に発信することで、国内外の利己心研究の標準を作り上げることも目的とした。

3. 研究の方法

研究方法は、経済思想あるいは経済学史におけるテキスト分析が用いられた。特に、系譜学の手法を採用することで、多様な経済学者たちのそれぞれの経済主体像、人間像を通史的に様々なコンテクストから解明することが可能となる。

経済学における利己心像の通史的、系譜学

的解明はこれまでに存在しなかった独自性の高いプロジェクトである。

また日本の研究者だけではなく、アメリカやイギリス、フランス、フィンランドからの研究者をプロジェクトに加えて、毎年度複数回の英語での研究検討会を開催し、ブラッシュアップと国際化に努めた。最終的には英文書籍の形式で成果の公表を目指しており、作業が進行中である。

4. 研究成果

研究分担者ならびに研究協力者が以下の成果に貢献した。

太子堂正称は、ハイエクの利己心観について考察し、彼の議論が、新古典派経済学が基づく単純な効用最大化行動とは異なる、個人の多様な動機を前提にしていることに焦点を当てた。その上で、適切な法によって制御されない利己心が政治的な集合的利害と化し、経済秩序を攪乱するだけではなく、独裁政治を招く危険性が存在するとともに、その防止策としてのルールや制度設計論との関連について検討を行った。

井上義朗は、W.S.ジェヴォンズの後をうけ、資源配分理論の基礎を築いたとされる P.H.ウィクステッドに着目し、その資源配分論の真意が、今日言われる経済的効率性の追求には必ずしもなく、貴賤に関わらず共有される経済行動の原理を明らかにすることによって、社会的包摂を企図する経済・社会政策を基礎づけることにあったことを解明した。

間宮陽介は、近代において利己心概念が解放されたことの副産物的な帰結として、社会秩序をどのように正当化するかの問題が新たに生じてきたことに焦点を当てた。特に、利己心の相互作用から生じる自生的秩序としての市場の限界に着目し、パークやケインズが、市場を前提としつつ、その不確実性に対して、慣習を重視する立場から制御を行おうとした意義について分析した。

桑田学は、オットー・ノイラートの経済思想に焦点を当て、利己心という経済動機を前提としない経験主義的な経済学のあり方を探るとともに、これまで十分に論じられることのなかった 20 世紀初頭の論理経験主義(科学哲学)と経済学の関係について分析を試みた。

原谷直樹は、経済学と利己心の関係について、経済学者がどのように利他的行動を説明しようとしてきたのかという観点から新たな光をあてるべく、G. Becker や R. Sugden、V. Smith などによる利他主義に関する論説を取り上げて検討を行った。その結果、利他的行動の含意の変更や利己性の範囲の拡張など、利他的行動を説明するためにさまざまな方法が取られているにもかかわらず、何らかの意味での最大化モデルは常に維持されていることを示すことができた。

野原慎司は、アダム・スミスについて、経済学の祖であり、利己心を肯定した人スミス

というイメージが未だに流通する一方で、そうではない非利己的なスミスの人間観の研究も、『道徳感情論』をベースにしながらい進んで来たことを指摘する。その上で、なぜスミスが『国富論』において、その非利己的な人間観をあまり叙述しなかったのかという問題に対して、『国富論』が、個人の所有権を守ることに基礎を置く法学的な人間観をベースにしていることにあるという回答を示した。

高橋泰城は、最新の行動経済学や神経経済学の成果を援用しつつ、現代の経済学における、利己性を含む主体像の多様性について検討を行い、研究成果全体の現代経済学への適用の足がかりを築いた。

板井広明は、ベンサム功利主義におけるマジョリティー・ルールの問題について、彼の快樂主義的人間観と制度構想を軸に少数者の擁護の論理と、また経済循環における人間の再生産の場である家族のありようについて検討し、ベンサムの草稿をベースにしてそのリベラルな結婚制度構想とを明らかにした。

江頭進は、思想史的な人間像の解明や現代の経済学の成果を踏まえた上で、経済現象のコンピューター・シミュレーションに基づきながら、旧来の利己的人間像モデルだけではなく、利他性をも含んだ新たなモデルの構築の可能性を示した。

小沢佳史は、利己心をめぐる J. S. ミルの見解を検討した上で、彼の目的が「短期的には、現存する個人の利己心と公共善とを結び付けるような制度を政府が作り、長期的には、植民と学校教育や、アソシエーションを通じて、政府などが個人の利己心を啓発しさらには公共心を育てていく」というものであったことを明らかにした。

佐藤方宣は、フランク・ナイトの利己心観について、従来は対立するとされたりベラルな制度派との共通点や、従来は同一と見なされてきたリバタリアン的なシカゴ学派との相違に注目するなかで検討し、20世紀アメリカにおける利己心評価の系譜について通説とは異なる視点を提示した。

笠井高人は、カール・ポランニーの資本主義批判の基礎となる人間の経済行動の動機が、制度との関わりにおいて形成されること、そして、経済的利己心だけでなく、多様な動機に依拠した生活の実態に基づく実質的な経済を描く理論を彼が志向したことを明らかにした。

研究協力者である高橋聡は、新古典派経済学の基盤を築いたワルラスの人間観について再検討を行い、それが彼の最終的な目標であった、土地の国有化を含む社会経済学への理論的基盤であったことを解明した。

同じく研究協力者である村井明彦は、限界革命において、メンガーのみは等価交換を否認したことに焦点を当て、その上で、後継者であるミーゼスについて検討を行い、彼がそ

の延長線上に、どの数量でも一括りと見る「関心単位の限界原理」から不等価互惠交換を描き出したことに着目する。これにより利己的主体の行為様式の定式が完成するとともに、この真の「主観革命」によって飽和主義的不経済学が克服されたことが明らかにされた。

以上の研究成果は、招聘した複数の外国人研究者の論考とともに、英文書籍の形で公表される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

高橋泰城「セイラーの行動経済学研究と意思決定会計学」『企業会計』70(3号)、2018年、131-134、査読無

井上義朗「二人のヒックス? 20世紀経済学への、ある回顧」『学際』4巻、2017、75-85、査読無

笠井高人「カール・ポランニーの『複合社会』と公共の射程」『社会科学研究年報』第47号、2017、13-26、査読無

桑田学「オットー・ノイラートにおける物理主義と経済科学」、『立教経済学研究』、査読無、2017年、70巻3号、1-23頁、査読無

桑田学「人新世と気候工学」『現代思想』45(22号)、2017、122-130、査読無

Hiroaki Itai, Akira Inoue, Satoshi Kodama "Rethinking Nudge: Libertarian Paternalism and Classical Utilitarianism" *The Tocqueville Review/La revue Tocqueville*, 査読無、2016、vol.37, no.1, pp. 81-98

笠井高人(2016)「カール・ポランニーの功利主義批判とベンサムへの評価:二重の運動と社会主義」『経済学論叢』第68巻、第3号、pp. 17-39(査読なし)

Tsurugizawa, T., Tokuda, S., Harada, T., Takahashi, T., Sadato, N. "Pharmacological and expectancy effects of a low amount of alcohol drinking on outcome valuation and risk perception in males and females" *PLoS one* 11(4), 2016, e0154083. 査読有り

Hino, M., Irie, Y., Hisakado, M., Takahashi, T., Mori, S. "Detection of Phase Transition in Generalized Pólya Urn in Information Cascade Experiment, *Journal of the Physical Society of Japan* 85(3), 2016, 034002, 査読有り

Y Ohmura, T Takahashi, N Kitamura, Discounting Delayed and Probabilistic Monetary Gains and Losses by Smokers of Cigarettes, *Behavioral Economics of Preferences, Choices, and Happiness*, 179-196, 1月, 2016、査読有

桑田学「フレデリック・ソディと 破局の経済思想:原子力・気候工学・金融化」『現

代思想』第43巻・第13号、2015年、186-499、
査読無

野原慎司「アダム・スミスにおける貧困問題対策」『経済学論集』第80巻1.2号、2015年、74-90、査読無

〔学会発表〕(計16件)

Takato KASAI, "The Origin and Formation of "Nineteenth-century Civilization" The 14th International Karl Polanyi Conference "Great Transformation and Contemporary Crisis", Karl Polanyi Institute Asia (KPIA), Seoul/ South Korea, 12-14 October, 2017

板井広明「ベンサム社会構想と再生産～女性・結婚・家族」社会思想史学会第42回大会、2017年11月4日、京都大学

Takato KASAI " 'Socialistic' Design for the Future Based on Karl Polanyi's Theory: The Evolution of Bentham's and Owen's Ideas on Poor Relief" A Great Transformation?: Global Perspectives on Contemporary Capitalisms (International Conference), Johannes Kepler University, Linz/ Austria, 10-13 January, 2017

Takato KASAI "Karl Polanyi's Criticism of Economics and the Origin of His Poor-Relief Ideas" Association for Evolutionary Economics at Allied Social Science Associations 2017 in Chicago, Swissotel, Chicago/ United States, 6-8 January, 2017

原谷直樹「経済学における存在論的前提の役割：ウスカリ・マキの経済学方法論」経済学史学会第81回大会、2017年6月3日、徳島文理大学

桑田学、草深美奈子「気候変動問題をめぐる社会的合理性と倫理」第15回科学技術社会論学会年次研究大会、2016年11月6日、北海道大学

Tokuda, S., Takahashi, T. A
"psychophysical comparison between intertemporal choices for self and others" The 31st International Congress of Psychology Yokohama 2016

Kinjo, T., Takahashi, T. 「意思決定における非合理性の量子意思決定モデルによる研究」行動経済学会 第10回記念大会、一橋大学、2016年

Nohara, Shinji "Adam Smith's science of commerce", The History of Economics Society, June 18, 2016. Duke University

野原慎司「サン・ピエールにおける戦争と平和」社会思想史学会第41回全国大会、2016年10月30日

野原慎司「『アダム・スミス文庫』から見えてくるスミス像」経済学史学会第80回全国大会、於、東北大学、2016年5月21日

経済学史学会第80回大会,セッション「利己心の系譜学 ハイエク・ポランニー・神経経済学」(組織者:太子堂正称、報告者:笠井高人、高橋泰城、討論者:間宮陽介、若森みどり),於東北大学,2016年5月21-22日
太子堂正称「ハイエクにおける利己心と制度論」、笠井高人「カール・ポランニーの人間像と利己心」、高橋泰城「神経経済学における利己心」

Hiroaki, ITai "Ethics of Eating Meat in Japan: the Coexistence of Humans and Animals", International Conference: Animals in Japanese Culture and Religion, The IX Days of Japan, 2015年11月17日、the University of Warsaw, Poland

Kuwata, Manabu. 'Historical Contexts of Frederick Soddy's Biophysical Economics: the First World War and 'the Inversion of Science'', 4th ESHET-JSHET Joint Conference: "War in the history of economic thought", September 13, 2015, Otaru University of Commerce

Nohara, Shinji, "Adam Smith on the value of silver," at the conference of the International Society of the Eighteenth-Century Studies, Erasmus University, Rotterdam on 30 July, 2015

佐藤方宣「佐和隆光『経済学とは何だろうか』とは何だったのか」経済学史学会第79回大会、2015年。

〔図書〕(計13件)

Egashira, S. "Agent-Based Simulation as a Method for International Political Science: A Way of Expression Diversity," M. Tadokoro, S. Egashira, and K. Yamamoto ed. *Emerging Risks in a World of Heterogeneity*, Singapore, Springer, 2018

吉永明弘、福永真弓編(桑田学)『未来の環境倫理学(「気候工学とカタストロフィ」)』勁草書房、2018

井上義朗『「新しい働き方」の経済学』現代書館、2018

小沢佳史(田上孝一編著、石野敬太・鷲田睦朗ほか著)社会評論社、『権利の哲学入門』(第8章「J. S.ミルの権利論」)、2017年、320頁(118-131頁)

Shinji Nohara, "In the Library of Adam Smith," P. J. Corfield and L. Hannan (eds.), *Changing arts of communication in the eighteenth century*, Paris:Honore; Champion, 2017

Shinji Nohara "Hume and Smith on morality and war," A. Rosselli and Y. Ikeda (eds.), *War in the history of economic thought: economists and the question of war*, 2017, London: Routledge

若松良樹編(板井広明)『功利主義の逆襲』(「古典的功利主義における多数と少数」)ナカニシヤ出版、2017

Takahashi, T. 2016, "Loss of Self-Control in Intertemporal Choice May Be Attributable to Logarithmic Time-Perception" Ikeda, S., Kato, H.K., Ohtake, F., Tsutsui, Y. *Behavioral Economics of Preferences, Choices, and Happiness*, Springer Japan 117-122

太子堂正称「第6章 ヒュームとハイエク」道重一郎編『英国を知る』同学社、2016

板井広明(菊池理夫、有賀誠、田上孝一編著)、晃洋書房、『政府の政治理論～思想と実践』(「功利主義と政府」) 2016

井上義朗『読むミクロ経済学』新世社、2016

井上義朗『読むマクロ経済学』新世社、2016

太子堂正称「第14章 ハイエクと現代共和主義論」坂本達哉・長尾伸一編『徳・商業・文明社会』名古屋大学出版会、2015

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太子堂 正称 (TAISHIDO, Masanori)

東洋大学・経済学部・准教授

研究者番号：40511332

(2) 研究分担者

井上 義朗 (INOUE, Yoshio)

中央大学・商学部・教授

研究者番号：00232570

間宮 陽介 (MAMIYA, Yosuke)

青山学院大学・総合文化政策研究科・特任教授

研究者番号：00252502

桑田 学 (KUWATA, Manabu)

福山市立大学・都市経営学部・准教授

研究者番号：20745707

原谷 直樹 (HARAYA, Naoki)

群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：30707138

研究者番号：30707138

野原 慎司 (NOHARA, Shinji)

東京大学・大学院経済学研究科(経済学部)・講師

研究者番号：30725685

研究者番号：30725685

高橋 泰城 (TAKAHASHI, Taiki)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20745707

板井 広明 (ITAI, Hiroaki)

お茶の水女子大学・ジェンダー研究所・特任講師

研究者番号：60405032

研究者番号：60405032

江頭 進 (EGASHIRA, Susumu)

小樽商科大学・商学部・副学長

研究者番号：80292077

小沢 佳史 (OZAWA, Yoshifumi)

九州産業大学・経済学部・講師

研究者番号：80772095

佐藤 方宣 (SATO, Masanobu)

関西大学・経済学部・教授

研究者番号：90286609

笠井 高人 (KASAI, Takato)

同志社大学・経済学部・助教

研究者番号：90755422

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

高橋 聡 (TAKAHASHI, Satoshi)

村井 明彦 (MURAI, Akihiko)